

---

# MOON-4 夜叉 8

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 8

### 【Zコード】

N6256M

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

紅色を放つ満月の下、和人と桜との決戦が始まる - - MOON  
シリーズ

第4弾　『夜叉』第1部第8話です。

## 満月・1(前書き)

長い。。。 (一 ¥) 一応、『夜叉』1 クライマックスです。『恋  
読の程を・・・・・

そして、満月。

紅の光を宿した妖しく輝く月。

『昼の人々』が深い眠りに就いている頃、和人たちはリビングにいた。

和人はソファで、裕希と朝子と秀はカウンター・キッチンでコーヒーを飲みながら。

「裕希。」

和人は静かに声をかけた。「そろそろ寝た方がいいんじゃないかな？」

「うん……。」

裕希は軽く頷き、カウンターの上に開いた化学の本を必死に読んでいる。その『勉強』をサポートしているのが隣の席の秀。朝子も今夜はキッチンの中ではなく、椅子の上にいた。

「裕希。」

和人はもう一度、声をかけた。

皆、無言である。

そんな雰囲気が裕希に不安を与える、勉強へと集中させていた。心持、朝子の表情も暗い。

「ねえ、秀さん。」

その沈黙に耐えきれず、裕希は秀に声をかけた。「どうしたの、皆何かいつもと違うよ。」

「そう?..」

黒縁の伊達メガネをかけた彼は、「別にいつもと同じじゃない? 次どれやる?」

目の前の灰皿にはセブン・スターの吸い殻が積まれていた。

彼はまた一本タバコを取り出した。

いつもの『夜食』の時間も今夜はない。

和人もPIANISSIMOを先刻から吸っている。

(どうしたんだろう?)

裕希はそう思いながら、教科書のページをめくった。今は期末試験の事だけを考えよう、と集中する。

時計の針が深夜1：00を過ぎた頃。

「秀。」

ソファの和人が立ちあがつた。「行こう。」

「ああ。」

秀も席を立つ。

「また『闇』?」

裕希はキツチンを通り過ぎる彼らに向かって声をかけた。

「和人、秀。」

不安そうな表情の朝子も声をかける。

「必ず帰つて来るよ。」

玄関で和人は振り返つた。「BYE。」

「朝子を頼むぞ、裕希。」

秀もニヒルな笑顔でタバコをくわえたまま、そう告げる。残された2人の前で、

ガシャン・・・・・・

ドアは閉じられた。

「和人、秀!」

朝子が今にも泣きそうな声で呟いた。

「大丈夫だよ、朝子さん。」

裕希は立ち上がり彼女の肩に手をかけた。

「・・・・・大丈夫。いつもの様に何事も無かつた様に和人も秀さんも帰つて来るから。」

「裕希くん・・・・・・・・」

そう声をかける彼女に少年は強く頷いて見せた。

いつの間にか - - - 少年は大人へと変わっていた。

2人はプリンスホテルの方向へ向かつて、深夜の空を飛び、やがてその路上に舞い降りた。

無数の紅の瞳がそこにあつた。

「九桜様の『復活』を。」

「九桜様を我らの『帝王』に。」

新宿中の『闇』がそこに集まっていた。

「やはり、あの桜という子と榊と言つ青年のせいだな。」

周囲を見やり、和人は言つた。

「ここは俺に任せて、お前は桜の所へ行け。」

早くも襲つて来た一人目の吸血鬼を蹴り倒し、秀が告げた。「俺もすぐ後を追う。」

「わかった。」

和人は地を蹴り、プリンスホテルの屋上へと向かつた。

人工灯さえ消えさせたこの時間 - - - そこで彼らは待つていた。

「やつと来たようだよ、お嬢。」

黒のスース姿の榊が、天空の月を背景に眼前に舞い降りた和人に気付き傍らの少女に囁いた。

「やつと、ね。」

あどけない笑みを浮かべる少女 桜は目の前に立つ和人を見つめ、「秀をおいてきちゃったの？」

「あまり甘く見ない事だな、俺たちの事。」

和人は目を細め - - - 既に先制攻撃を仕掛けていた。

バツ・・・・・

左手に宿した青白い炎を桜に向かつて放つ。

「甘い。」

神は桜を抱くと、天空に飛翔した。

プリンスホテルの貯水槽が、和人の炎を受け壊された。

દુનિયા

水が一斉に飛び散る。

和ノは境を越す

青年の腕の中で寝ねつた。「私がやめた。神は秀をやつじ。」

「了解。」

2人は別々の方向へと飛んだ。

秀は都府通りで數十人の吸血鬼を相手にしていた。

「その『紅色の意味』は『反対が必ず』」。

背後から襲つて来た二一ト風の男性を周り蹴りで倒し、再び前方

卷之三

黒いスーツ姿の男性がその中央に立つていた。「神。」

一 今夜は『満月』

桜は微笑した。——「これでお互いノエアたな」

卷之三

い爪を伸ばす。

遅いよ

卷之三

秀は振り返り、目を細める。「貴様……吸血鬼じゃないな。」

「だから、『満月』を待っていたのです。」

神も自分の眼前に鋭く伸びた爪をかざし、

「確かに、『九桜の側の血』を受け継いでいるが」

疾風の早さで秀へと飛び込む、榊。『元はお前と同族だ。』

「何！？』

秀も暴天で攻撃をかわし、「お前も狼男ウルフガイなのか？」

(一族で残つたのは俺だけじゃなかつた・・・・)

彼は思い、近くのビルの屋上へと飛んだ。

その後を榊が追う。

「なら何故、九桜の側に従う！」

秀は振り返り、「俺たち一族を『根絶やし』にしたのは九桜だろ

！」

「そうさ。」

榊はビルからビルへと飛び移る秀の後を追い、「お前も和人から離れる・・・生き延びたかつたら。」

「どういう事。』

「同族よしみの好事。』

榊は秀に追い付き、その懷へ飛び込んだ。互いの爪が胸を貫いたのは同時だった。

「！・・・・・」

「つ・・・・・・・」

秀は苦痛を顔に浮かべながら、右足を榊に向けて蹴りあげた。

「！・・・・・」

寸前の所で、榊は攻撃を逃れる。

月明かりが・・・2人を暗闇の中に浮かび上がらせていた。

「俺と一緒に桜の元へ来い。』

榊は言った。「お嬢は今夜『帝王』を倒す。』

「そんな事あるはずない！』

秀は叫んで、再び接近して来る榊に向かつて、「どれ程強い『血

をもつても桜は帝王を倒せない！』

「そうかな？」

2人は絡み合いながら、「だったら見に行く? 桜と帝王との闘いを。そして」

と、天空に浮かぶ『紅の月』を指示し、

「何でお嬢が『今夜』を待っていたか知るために。」

「待つていた?」

お互いの首筋を狙いながら、対峙する秀と榊。

「・・・・・何を企んでる、貴様ら。」

「ふふ・・・・・・」

榊は微笑し、「その意味を知りたかったら俺の後を着いて来るんだなーーーそしてその目で見てみな。」

均衡を破ったのは榊の方。

彼はプリンスホテルの方向へと飛翔を変えた。それに続く、秀。

星が瞬いた。

満月・1（後書き）

へたりあ———つ———（『夜叉』3のプロットが。。。）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6256m/>

---

MOON-4 夜叉 8

2010年10月10日14時04分発行